
川端 繁樹 (かわばた しげき)



【書名】考えるヒト

【著者】養老孟司

【発行】筑摩書房 (ちくまプリマーブックス)

自然科学では十分説明できないものを、論理的に捉えて考えるとはどういうことか、を考えさせてくれる書。同著者の『カミとヒトの解剖学』(ちくま学芸文庫)、『日本人の身体観の歴史』(法蔵館)と重なっていて、どの本のどこに何が書いてあったか記憶はあいまいですが、それらの中で最も字も大きく、分量も少なく、手軽に読めます。

【書名】早すぎた発見、忘れし論文——常識を覆す大発見に秘められた真実

【著者】大江秀房

【発行】講談社 (講談社ブルーバックス)

今では自然科学の教科書に普通に載っていて、こんな発見をよくもしてくれたものだと思う科学者も、現役時代には苦勞したことがわかります。現役時代に認められなくても、大したことではないのかもしれませんが、自分が認識できないときに認められてうれしいことはない、と思ってしまうのは凡人だからでしょうか。

なおこの本は著作権の問題があり、出版社で回収・絶版の措置が取られています。著作物の引用には気をつけるとともに、被引用物にあたってみるのも面白いかもしれません。

【書名】パラドックス！

【著者】林晋 (編著)

【発行】日本評論社

哲学者も自然科学者も、ある意味で少し頭がまともとは言えません。こんなことを問題にして、頭を悩ませているとは。でもその中から、何かを見つけ出し、ただでは起き上がらない能力はさすがかもしれません。書き方はそれほど難しくありませんが、扱っている内容がときにより高度なので、私自身も十分に理解できていません。理解できれば、深みにはまるかも。

【書名】完訳 三国志 全8巻

【著者】小川環樹、金田純一郎 訳

【発行】岩波書店（岩波文庫）

PCのゲームでやっている以上、一度は元の話を読んでおこうと思って読み始めたら、やめられなくなりました。人を登用し、うまく活かすことの重要性、人を失わずに勝つ戦略、人の意見を聞く重要性、義を重んじる武将たち、官僚がときどきそれらをぶち壊してくれます。

もともと脚色した話のため、国が減ぶときには必ず、無能・暴虐の王が登場します。物語は、最後に晋が三国を統一して終わるのですが、この晋の帝が、真の歴史上でまたまた凄い暴君ぶりを発揮してくれるので、中国の歴史は深遠です。

脚色された絵ではなく文章で読むと迫力が増します。ただ元の話を読むと、人物像がよくわかるため、ゲームの登場人物に傾倒できなくなる危険性あり。

【書名】三国志「その後」の真実

【著者】渡邊義浩、仙石知子

【発行】SBクリエイティブ

上記の「三国志」でも触れたように、三国志とその時代の興味深さは統一されても終わりません。そこに焦点をあてた書名が目に入った（2016年9月刊）ので、放っておくわけにはいかないでしょう。その後の真実というよりは、三国志の解説と、時代背景を記した論説文になっています。娯楽性はあまりありませんが、「三国志」の復習を兼ねるという意味では楽しめます。従って、元の「三国志」を文章で読み、要点をおさえておかねばなりません。

あらためて漢という王朝が、創設期と滅亡期に現出した歴史絵巻の魅力と、中国の社会と文化に与えた影響の大きさを感じます。残念なことに文化的・政治的な背景に重点がおかれているため、晋の帝の暴君ぶりや、滅びゆく国の王の人間的な特徴がわかりません。政権や王朝を維持するのは並大抵ではなかったのでしょうか。

- 【書名】 その数学が戦略を決める
 【著者】 イアン・エアーズ (山形浩生 訳)
 【発行】 文藝春秋 (文春文庫)

2007年出版の同名の書籍を、増補し文庫版化したものです。元の題名が“Super Crunchers”で、辞書によるとcrunchとは「ザクザク砕きながら進む」、「大量の数値計算を行う」という意味で、cruncherには「とどめの一撃」という意味もあります。本書は統計学による数値計算を使って政策や商品の販売戦略が決められ、果ては人間の行動も予測できるという話が出てきます。しかもその数値を取るための実験に、私たちが知らない間に参加しているということも。そして専門家の経験による判断が、数値計算より大抵劣っているということも思い知らされます。これは、数値データの持ち合わせ無しに意見を主張するなという識者に対する警告かも知れません。また特にインターネットの世界では、こんなふう消費が誘導されていると改めて気付かせてくれます。ただ5%のはずれが、1年では18日にも相当するので、ここにこそ真の楽しみ・発見があるという気もしないではありません。

- 【書名】 π の歴史
 【著者】 ペートル・ベックマン (田尾陽一、清水韶光 訳)
 【発行】 筑摩書房

書名の通りです。私が学生時代に読んだ本(1973年刊行)は、表と裏のハードカバーの裏に π が小数点以下1万桁まで書いてありました。これでも見開き2ページを埋め尽くしています。政治思想の話が時折気になりますが、人間と π との葛藤の歴史に惹き込まれてしまいます。コンピューターで10兆桁計算できる現在でも、基本は三角関数や数列・級数を駆使した人間の頭脳の闘いです。